

環境交流箱実施報告

期間:

2008年1月～2009年3月

目的:

- ・自分たちの身の回りの環境の特徴を発見し、他の地域の環境の特徴と比較する。
- ・他の地域の環境の特徴を知る。
- ・文化・環境の交流を持つ。

活動概要:

他の国の地域の生徒(小学生、中学生、また青少年教育団体に所属する子供など)と、テーマに沿って環境(住んでいる地域)を交換する。そのためにはまず、自分たちの住む地域のことを調べ、わかりやすく伝える必要がある。子どもたち自ら、どのような方法で伝えればよいのかを考え、そのために必要な物を準備し、ひとつの箱に詰めて、交換する。

交換する相手の地域のことを調べ、想像し、交換した箱が届いたらその中身を子供たちで分析する。これらの活動を通じて、自分の地域と交換相手の地域の環境や生活について知り、比較し、そこでの暮らしはどんなものか?、「環境」とはなにか?、地域により「環境」という概念の考え方に違いはあるか?、何が「環境」をよりよくするか?またしているか?、などを考える機会とする。また、他の国の地域の子供とのつながりをつくり、文化交流・国際交流を目指す。

参加学校・団体:

国名	学校・団体名
日本	ボーイスカウト京都第59団
セネガル	Association des Jeunes de Taba ngoye (Kaolack)
コスタリカ	小学校
セネガル	Association pour la Sauvegarde des enfants et des familles (Kaolack)
コスタリカ	ブラシリート小学校
セネガル	Ecole Keur Layne gueye (Nioro)
日本	小学校
セネガル	Ecole Nimzatt (Kaolack)
コスタリカ	青少年団体
日本	青少年団体
日本	青少年団体
コスタリカ	小学校

* 団体名は名称の記載の許可をいただいた団体のみ記載。

その他は種別(青少年団体、小学校、中学校の別)のみ記載

実施の流れ:

< 広報 >

Earth-PAL のHP及び、メール等で参加団体の募集を行なった。

< エントリー >

参加団体エントリー (国名・地域・団体名・連絡先・参加者年齢層・参加者人数・実施可能期間など)

< マッチング・相手団体の決定 >

エントリーされた団体の中から、年齢層・人数・実施可能期間等を考慮して相手団体を決定した。

決定後、相手団体の詳細 (連絡先・箱の送付先を含める)、実施期間を双方の担当者の方に連絡した。

< 実施 >

参加団体の先生・リーダーにファシリテーターとなっただき、活動を実施した。(全て参加団体の先生やリーダーに指導にあたっていただいた。)

テーマは「私たちの環境」「私たちの地域の環境」「自然と私たち」

実施の流れ

Part A (導入～調べ学習、箱の準備 目安期間: 2週間)

他の地域(世界の国々)の生徒たちと「環境(自分たちの身のまわり)」を交換します。

でも、あなたは自分自身の地域の環境をよくは知りません。(まずは調べるところから！)

環境を交換する相手に自分の地域を伝えるためのアイテムを考え、準備しましょう。

何を箱に詰めるかアイデアを出し合い、リストを作成し、準備しましょう。

例えば、地域の簡単な特徴(気候やどこにあるのか)、写真、絵、地図、手紙、本、歌(CDやビデオ)などが考えられますね。

Part B (箱が到着するまでの期間: 約2ヶ月 調べ学習、及びクラスでの発表 目安授業数: 2・3回)

箱が来るまで待っている間、相手の地域について知っていること・聞いたことのあることについて話し合しましょう。(図書館やインターネットでの調べ学習も有効です)

Part C (箱が到着してから 比較・分析及び討論、子ども達の学びがもっともある部分です。出来るだけゆっくりと分析、十分に考え討論できる時間をとってください)

箱が到着したら、みんなであけて中身を見ましょう。

そして、自分たちの地域と箱の中の地域を比べましょう。

違いや箱に入っていたお気に入りのアイテムについて話し合しましょう。

その地域の生活について想像してみましょう。

発展として、「環境」について討論することもできます。

「環境」という概念の考え方に違いはあるか？

何が「環境」をよりよくするか？またしているか？

* 子ども達の感想、気づきをシェアするふりかえりの時間をとってください。それぞれの新しい発見につながるかもしれません。

PartD (お礼とまとめ)

手紙かEメールで簡単なお礼状を送りましょう。

このとき、相手の地域に関する質問や、交換した箱の感想を伝えてもいいでしょう。

その後も、パートナーと連絡を取り続けることもできます！

* 実施したこと、感じたこと、気づいたことを、他のクラスの生徒や周りの子ども・家族に発表するのもいいふりかえりと体験のシェアになりますね。

< 評価 >

参加団体に活動評価シートの記入をお願いした。

評価アンケート集計

以下の項目で5段階で評価していただいた。集計は平均。

5:とてもそうおもう 4:そうおもう 3:ふつう 2:あまりそう思わない 1:そう思わない

子ども達は楽しんで取り組んでいた。	4.17
子ども達は主体的に取り組んでいた。	3.83
子ども達の環境に対する意識を深めることができた。	4.5
子ども達の世界への興味・関心を広げることができた。	4.67
このプログラムの目的は明確であった。	4.67
私(授業実施者)は子ども達の主体的な学びの為にファシリテーターとしての役割を果たせた。	4
プログラムのコーディネート(相手校の決定・連絡等)はスムーズに行われた。	4
プログラム実施にあたり必要な資料・情報はきちんと提供された。	3.5
このプログラムは有意義であった。	4
今後も相手校(団体)と交流を続けたい。	4.67

子ども達の声・反応(アンケートより)

- ・ 初めて、外国人から手紙をもらったので、子どもたちは興味津々であった。出会いがよかったので、セネガルの対する興味関心が高まり、もっとセネガルのことを知りたいという気持ちを高めることができた。
- ・ 子供たちはみんな興味津々で、とても楽しいんでいました。プログラムを行う前までは名前も知らなかった国のことを知り、そこに同年代の友達まででき、先生も子供たちも、みんな非常に喜んでいました。特に、届いた作品を作成した子の顔を写真と照らし合わせて、「この子が作ったんだ」と今自分が手にしている作品をまじまじと見ていたのが印象的です。歌やダンスの画像が見られたことにもとても喜んでいました。
- ・ 子供達はとても興味をもって取り組んでいました。

プログラムを終えての感想(アンケートより)

- ・ 1往復ではなく、2往復くらい交換ができると、より具体的なふれあいができると思う。
- ・ このプログラムに携わることができて、本当によかったです。参加させていただいて本当にありがとうございました。私自身もこのプログラムに参加させていただくことでいろいろな気づきがありましたし、子供たちに関してはもっと大きな気づきがあったと思います。子供たちの世界観や、環境、自分の住んでいる地域に対する意識は、プログラムを行ったことで、確実に変わったと思います。教材や資金が不足する途上国の教育において、青年海外協力隊の方々の国境を越えたネットワークを活用したこのプログラムは、非常に有意義なものだと思いました。これからもぜひ、このようなプログラムで違った国同士の子供たちがつながりをもつことができれば、とても素敵だと思います。
- ・ 今回の活動を通して、子ども達が自分の周りの環境と全く知らない他国の環境を比べることで、地理的、文化的、経済的といろいろな観点から、外国や外国の人、その人たちの暮らしへの興味を持ってもらうことができたと思う。また両者の違いを考え、その違いを尊重する気持ちを持つことで、子ども達の将来にわたっての国際交流の導入的なプログラムにすることが出来たと思います。
- ・ とてもいいプログラムだと思います。子ども達の知識、興味を向上させることができました。
- ・ 私達にとってとても新鮮なプログラムでした。しかし、(子ども達主体の授業が今までにないため、)ファシリテート・進行が難しかったです。
- ・ このようなプログラムはいままでに体験したことがなかった。相手校とよい交流ができた。

プログラムの改善点、気づいたことなど(アンケートより)

- ・ セネガルは、遠いですね。日本との学校の始まりやバカンスの時期が違うから、時間的制限がある。長期的に取り組めると、単発的な活動ではなくなると思う。こういう活動を行うときに、荷物を運んでくれる日本人・現地でコーディネートしてもらえる日本人の存在の必要性を強く感じた。ご協力ありがとうございました。

- ・ このプログラムを実行するにあたって、大人はあくまでファシリテーターに徹するということが非常に重要だと思いました。子供たちが自分で考えたうえで、彼らの気づきをうまく引き出すということは、ただ単にこちらがもっている知識を教えるということとは違うので、それになれてしまっている人にとっては意識して取り組まないといけないプログラムを行う意味が薄れてしまうと感じました。私としては意識したつもりだったのですが、その点を、協力してもらった現地の先生に共有できていなかったために、先生が黒板に書いた例文を子供たちがそのまま書き写してしまったり、ダンスの映像を楽しく見ていたはずの子供たちが、先生が「この子たちはとても貧しいのよ。かわいそうね。」という、子供たちも「そうかこの子たちはかわいそうなんだ。」という目で見えたりしました。途上国の教育現場においては、子供たちが主体的に考え、学ぶというスタンスがまだまだ浸透していないということに留意した上で、新しい教育の方法を共有し、広めていくことができれば、このプログラムを行う意味がより一層深まるのではないかと思います。
- ・ より深い興味・関心の為に、継続的に何度も交流が出来ると素晴らしいと思います。

参加した子ども達からの感想文

参加した京都のボーイスカウトの皆さんから、それぞれの感想文を頂きました。日本の子ども達の途上国に対する素直な気持ち・意見を表していると思いますので、原文のまま掲載します。

おくられてきたものを見て

僕は、セネガルのイメージを言い合う時には、不便で、日本で言う戦争後ぐらいのレベルだと思っていたけれども、セネガルから送られてきたものをみるとずいずいとして、けっこう便利な暮らしをしていることがわかった。

CDなどでも、見てみると服もちゃんと着ていてすごいなあと感じました。ボーイスカウトで調べたよりもはるかに文化が盛んだということがわかった。トラックも通っていて「えええ〜」と思った。セネガルは、以外にも日本並みの文化があるんじゃないのかなあとも思います。セネガルの食べ物でも、チャブ・ジェンとか言う食べ物もあり、なかなかうまい感じだったし、その時、「なに？」というくらいビックリしました。

セネガルは思っているよりすごいと思います。

おくられてきた物を見て

僕はセネガルのことは知らなかったからイメージをして、貧しいと思っていました。送られてきたものを見て、自分が思っていたよりも、しっかりした生活をしていて、スポーツもしていて、とても日本に似ていました。僕は、送られてきたものを見て、CDとか白黒のハンドブックもあってすごいなと感じました。

僕は、セネガルの人と交流して、セネガルについて知れてよかったです。

セネガルから送られてきたものを見て思ったこと

僕は、最初セネガルはびんぼうで日本で言う戦後レベルと思っていたけど、トラックがあつたりサッカーとかが人気で、日本と同じようなところもありました。

セネガルの人が描いた絵を見ると、筋肉むきむきの人もいたり、緑色の顔の人もいておもしろかったです。

料理とかも日本でいうカレーライスみたいな料理でした。

服も半そでだったから、気候は暑いのかなぁ～と思いました。一人顔なしもいました。

ダンスや歌も楽しそうで一度行ってみたいと思いました。

セネガルと交流をして思ったこと

僕は、発展国に住んでいても「めんどうだなぁ～」と思うことがたくさんあるのに、途上国はそれがあたりまえのことになっていて、こんなので人が生活できるんだ。と思った。でも想像と比べると日本の生活に近かった。例えば、服とか着ていないでパンツだけと想っていたらTシャツを着ていたり、ペンや色えんぴつや紙もとても貴重なのかと想っていたら、写真もあるし白黒のスカウトハンドブックもあっておどろいた。

けれど、やっぱり水道も無いし、家もボロいし、ガスも無いので不便そうだ。

やっぱり、本当のくわしいことは行ってみないと分からないが、だいたいのなんとなくのイメージが分かった。

一番ひどいと思ったのは、セネガルのスカウトが半年も前からいっていた約束をすっぼかしたことです。

セネガルと交流をして

僕は、この活動を始めた時は、セネガルは貧しい暮らしで、機械などもなく、発展していないと思っていました。また、日本より進んでいない所だと思っていました。

そして、セネガルから色々なものが届き、それを見ていくと、トラックや、服などがあり、意外と進んでいたりもしていたし、ちゃんとした技術や、文化があることが分かりました。これまで想ったイメージより発展していておどろきました。

僕は、アフリカだといって、何も知らずに、すごい発展していないと思っていたけど、実際のことを知って、イメージだけでは決め付けてはいけな～と思いました。また、セネガルと日本では、考え方もちがうので、日本から見て変でも、そこの人々では当たり前だったり、常識かもしれないことも分かり、外国の見方が少し変わりました。

セネガルプロジェクトの結果

最初セネガルについて全くと言っていい程知らなかった。

でも、送られてきた物を見て、セネガルの踊りや文化などたくさんの事分かった。中にはよく分からないものもあれば、現地の食事の絵など、自分達が普段、目にしたこともないものがあった。やはり、日本の生活とは全く違っていた。生活だけでなく人間も違っていると。あの貧しい環境の中で、生き抜いていくことは、日本で生活するよりも厳しいと思う。今、日本人の若者は、駄目な人間が多いと言われているので、セネガルのような貧しい暮らしをしている人の生き方をもっと学ぶべきだと思う。

総合評価

< 課題 >

- ・体験型学習・生徒主体の学習を指導(支援)することの難しさ(特に途上国では顕著)から、学びの機会が減少していること。これは一朝一夕で改善できる問題ではないが、直接その場にファシリテートできる者が行く(呼ぶ)か、そういった事前研修を行った上での実施が望ましい。しかしながら今回のような世界の異なる地域で行うプログラムでは難しいことも事実であるといえる。
- ・現場の先生・指導者へのフォロー不足。国を越えてEメールだけのフォローには限界もあるが、情報共有や指導法の共有などのシステムをつくるなどの対策は可能であったのではないか。
- ・さらに連続性のあるプログラムの必要がある。今回は1年間の間を限定してその中での1往復のみの交流であった(2回目以降の交流をするか否かは各団体に委ねる形とした)。長期的な期間で継続した交流を行なうことでさらなる発見や深い理解をすることができる。

< 成果 >

- ・全体として、交流は良いものであったことは、アンケートでの「子供達は楽しんでいた」「子ども達の環境に対する意識を深めることができた」「子ども達の世界への興味・関心を広げることができた」「今後も相手校(団体)と交流を続けたい」等の項目の評価が高いことからうかがえる。今回のこのプログラムは「知るための導入」として、今後の国際交流・国際学習へつながればよりよい成果が得られるのではないだろうか。

活動の様子(各参加団体より写真の提供があったもののみ)

セネガル







日本





コスタリカ



以上

環境交流箱実施報告書
2009年4月作成
新堀春輔